

中国放送大学における学生の実態と意識

——都市と地方の比較を中心に——

今津孝次郎（名古屋大学）

○劉 勇（名古屋大学大学院）

1. 中国高等教育における放送大学の位置づけ

中国政府は、2005 年をめぐり、大学の進学率を上げて、現行の約 10%から 15～6%まで到達させることを計画している。今まで、普通大学の補充機関としての放送大学は、「現代遠隔教育開放大学」という目標を目指して、一連の改革を行ってきた。とくに、インターネットを利用する大学の一つとして、総合大学と一緒に中国高等教育の重役を担っている。

高等教育の質を重視する政府側は、放送大学の規模を、21 世紀の初頭に、毎年 100 万人の在学者と 30 万人程度の卒業生を維持することを計画している。ただし、この計画では、高等教育全体の学生に占める放送大学の学生数の割合はそれほど高くない。もし、中国が高等教育の大衆化を目標とするのであれば、放送大学の占める割合は極めて大きいと言わざるをえない。取分け人口の 80%以上を占める農村地域の高等教育拡大が重要であろう。

その点、放送大学が行政単位に沿って構築してきた省レベルの大学、地域レベルの分校、県レベルのセンターという三つの機関の存在は貴重である。センターは農村における高等教育拡大の中心機関となりうる。ただし、三つの機関の格差の是正にとりくむ必要がある。

2. 調査の目的と方法

(1) 調査の目的

高等教育の発展は、農村地域におくべきであるが、都市部での規模の拡大によっては、都市地域と農村地域と格差がさらに広がる可能性がある。それだけに、農村地域の高等教育機会の確保が重大な課題になっている。全国のネットワークを持っている放送大学は、農村の高等教育を拡大する理想的な機関であるが、農村地域における学生の学習状況や学習意識等に関する比較調査は今までほとんどない。

本研究は、都市と農村の差を視野に入れながら、放送大学の三つのレベル構造の特徴を活用して、放送大学機関の学生の学習目的、学習方法、機関側の教育支援サービスを地域別に比較しながら、放送大学の役割と今後の課題を明確にすることを目的とする。

(2) 調査地域

今回の調査地域として陝西省を選んだ理由は、国家プロジェクトの「西部開発」の中心地であり、三つの産業構造が揃っているからである。情報産業の西安市、工業の榆林市、農業の府谷県を選び、陝西省放送大学、放送大学榆林分校、放送大学府谷県センターを調査対象とした。

(3) 調査方法

調査対象は、三機関にいる「無試験入学、完全単位制度、個人学習を主としている開放教育学生、登録視聴学生と、全国成人統一試験を経て、選拔され、クラス単位で、パートタイムの時間を利用し、学習している成人専科パートタイムの学生」である。調査方法は、アンケート票により、西安では集合調査法で、榆林と府谷では留置調査法で行った。調査内容は①基本属性、②学習目的、③学習方法、④教育支援サービスである。調査時期は、2000 年 10 月である。回収数は 707 で、有効回収率は 88%であった。

3. 調査結果

(1) 学習目的

地域別、学生の年齢を見ると、府谷では 24 才以下の学生比率（70%）が最も高い。農業戸籍の数を比較すると、西安と榆林はほとんどいないが、府谷は半分以上を占めている。三つの地域では、いずれも高校卒業生の比率が高いが、府谷では、専門学校等の卒業生が数多く在籍している。「進学のための」という比率は最も高いが、府谷では、「学歴のため」（36%）は、西安（75%）と榆林（69%）に比べて、低かった。さらに、府谷では「国家に貢献するため」の比率（53%）は最も高い。農村では、まだ学歴社会になっていないうちに、これから地元のエリートを目指しているの、知識と社会貢献を重要視したことがわかった。次に、放送大学を「第一の選択」とする理由を分析すると、府谷では「カリキュラムの設置が社会の需要に応える」（38%）、榆林では「仕事の需要」（56%）、西安では「独学に適応」（88%）が最も多い。学習目的に対応して、府谷では、知識を持って社会に奉仕することが大切なことなので、

授業科目の実用性が重視される。榆林では、学歴を取るための学習は、仕事や転職等の動機で行っている。西安では、学習がキャリア・アップの手段も含めて、多目的で使われるので、現今の生活と仕事を維持しながら、学歴の取得を目指していることが多く、「独学に適応する」のが理想的なことなのであろう。三地域の様子を見ればそれぞれ社会、会社、個人のために放送大学を選択したという特徴があったといえる。

(2) 学習方法

「面接授業の回数」から見ると、週に3回以上の比率は、府谷、榆林と西安では、それぞれ75%、30%と45%となっている。府谷では普通の学校教育のモデルと一緒に考えると考えられる。「視聴回数」を見ると、面接授業より少ない、それに「自宅の視聴時間」が「ほとんどない」ので、放送大学の本来の姿が見られない。視聴授業は普通、正式な授業の時間と理解される。また、「学習問題の解決方法」を見ると、都市部の学生より、農村の学生が放送大学の先生に頼る比率が高い。

「参考書による解決」比率は、府谷は39%、榆林は58%、西安は62%で、独立で問題を解決する態度は都市と比べ農村の方が低いといえる。「学生と教師との連絡手段」を見ると、電話の利用率は、三地域とも高い。他の通信手段は、きわめて少ない。「独学にメディアの使用」を見ると、テレビの利用は、榆林(53%)、西安(43%)の両地域で最も多い。府谷では利用率が最も高いのはパソコンである。ただし、その利用は主にワープロと図表作成で、双方向交流のメディアとしての使用ではない。三地域では手紙の使用率が一番低かった。

(3) 学習支援サービス

「独学試験制度の参加」については、府谷の回答率が最も高い。また、「独学試験の単位が交換できる」比率も、榆林(8%)と西安(17%)より府谷(53%)の方が最も高かった。「現代教育技術の利用」について見ると、インターネットとEメールの使用率は、府谷(23%と3%)、榆林(33%と8%)、西安(22%と11%)の比率がある。双方向交流は学校でも、個人でも本格的な利用は、まだ不十分だと考えられる。VBIの利用は三つの地域とも20%以下にとどまった。VBIの使用は地方にとって、大きな情報源であるが、現在の利用率は非常に低いといわざるを得ない。CAIという教育ソフトの利用について、府谷、榆林と西安の利用率はそれぞれ、40%、6%と1%であった。また「よく利用する学校の設備」について、面接教室の利用率は三

地域とも高い。特に、都市部の放送大学の面接教室を利用する答えは91%に達した。遠隔技術の利用は不十分とはいえ、農村部では、情報機会が少ないだけに学校によるパソコンの利用がそれなりに積極であろう。

4. 中国放送大学の役割と課題

中国における遠隔教育は放送大学の構造に基づいており、中央から都市へ、都市の大学から地方の分校へさらに農村のセンターへという構図であり、個人を対象とするよりも、クラス単位の学生全体に講座を継続してきた。代表的なものは、「面接授業」と「視聴授業」である。都市より農村では放送大学に対する社会的な需要はずっと高い。都市では放送大学が成人リカレント教育の主要機関であれば、農村では、伝統的スクーリングを通じて、若者たちに高等教育機会を提供しているところだといえる。都市部では、個人学習(オープン・ラーニング)の需要が徐々に高まっているので、これからインターネットを含む助学の質が問われている。郵送とテレビ視聴で限界があった放送大学では、今後メディアの選択に迫られる。衛星放送とインターネットの役割により、放送大学システムにおける人間のネットワークの効率的な利用は重要な課題であると考えられる。

農村地域では、教育機関の助学能力と個人学習の環境が不十分なので、自宅の勉強は難しい。地理的な原因で、学生が学校に寄宿しなければならない。放送大学の三つの機関間の資源共有が極めて重要であろう。農村の助学の重点は、新メディアの導入より、キャンパスの中の伝統的な教育資源——教師、放送メディア、テキストと図書館の充実などが大切だと考えられる。都市と農村とのサービスはそれぞれ異なる次元で検討する方が有効であろう。

参考文献：

1. 中国教育部『二十一世紀に向けた教育振興行動計画』北京師範大学出版社 1999年5月
2. 放送教育開発センター『エリート段階における中国遠隔高等教育』研究報告 第77号 1995年1月
3. 中央放送大学編『中国遠隔教育』中国放送大学教育雑誌社 2001年5月～7月
4. 中央放送大学校長室編『放送大学文献集』中央放送大学出版社 1999年9月
5. 今津孝次郎『＜大学開放論＞の構想』『大学院教育プログラムの多様化とその課題』名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻編 2001年3月